

---

# 彼氏以上旦那未満 (トム夢?)

峰春秋人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼氏以上旦那未満 （トム夢？

### 【Nコード】

N1876M

### 【作者名】

峰春秋人

### 【あらすじ】

トムさんと湊都ちゃんの愛しあうストーリー！。

（前書き）

可愛いなあー湊都。

でも・・・けいおん

思い出すw  
w

彼氏にはふさわしくても旦那にするのは嫌。

いつかはプロポーズされて旦那になるのかもしれない。  
けど、今はそんなこと考えるのはやめて今を楽しもう。

「トムさん。」

「なんだい？」

「一緒に買い物行こうよ。」

「いいけど……。なんで？」

「アイスが切れちゃったの。」

「また？」

そう私がトムさんと同じくらい好きなのは「アイス」。

甘くて冷たいアイスは夏でも冬でも季節を気にしないで食べてしま  
う。

特にぼりぼりくんのソーダ味は一番好き。安くておいしいから。

トムさんとコンビニに入ると私はかごを持たないでトムさんが持つ。  
そこにドサドサッとアイスをいれていくの。それもぼりぼりくんだ  
け。

「あ！見てみて。新しい味があるよ！」

「本当だ。」

「コーヒー牛乳か……。」

「おいしいと思うけど。」

「そう？なら一本だけ買っておこう。」

「俺が食べる。」

「いいよ。一口もらうからね。」

「ああ。」

そんな会話はまるで夫婦ってよく言われるけど・・・ありえない。  
私はまだ高校2年生だしさートムさんってそういえばいくつ？  
20歳はあり得なくてせめて26とか？  
うわー歳が10以上離れてるって・・・複雑。  
まあ、いまさらトムさんと別れる気もわかないけど。  
コンビニを後にした私とトムさんは家へと足を進めた。

「トムさんさー結婚したい？」

「・・・別に。」

「そっか。」

「湊都は？」

「私はトムさんが旦那さんって考えると笑っちゃう。」

そう私は言っちゃった。

トムさんは苦笑しながら小さく「だな。」と言った。

私はただこの関係のままのほうがいい気がした。

ほら・・・人生ほとんどがそうでしょ？

目指していたことが達成されたらつまらない。

それと一緒に。

私とトムさんが結婚したらそれで何が変わってしまうの？  
もういろんなことにトキメかない？それとも普段のまま？

ならこの関係のままでいい。

私はトムさんと結婚する気は全くとは言えないけどそれほどない。

「トムさん。」

「ん？」

「家に泊まってるいい？」

「ああ。自由。」

そう。この関係。

自分の家と彼氏の家を行ったり来たりする関係。  
それがいいの。

同居なんていつも会えるから駄目。

まあ、私はトムさんに毎日会いに来てるけどね。

私の家は池袋と隣駅の大塚とのちょうど真ん中ぐらいに住んでる。  
だから、学校帰りに会いに行けばいいもの。

ちなみに学校は池袋の来良。あそこが一番落ち着くの。

「何食べる？」

「私が炒飯でも作るよ。」

「野菜少ないよ。」

「何がある？」

「えーと・・・ネギとニンジンだけ。」

「なら買い物行こう。」

「また外でるの？」

「私だけで行ってくるよ。」

「いや・・・一緒に行く。」

こうやってたまに食事を作ってあげられるのも恋人同士だから。

夫婦になったら作ってあげるの普通になっちゃうもの。

トムさんが私に感謝してくれるのがうれしいから。

スーパーにくるとトムさんはよくふらーつとどこかに行く。とくに、  
コーヒーのところに。

だから、私もコーヒーのところにいつも行く。

思ってたよりたくさんの種類のコーヒー豆に圧倒されてしばらくは  
押し黙る。

トムさんは何袋か手にとって首を振って棚に戻す。

「買いたいなら買えば？」

「いや・・・やめとく。」

と言ってトムさんは毎回棚の前から身を引く。

私がさりげなく値段を確認すると5千円弱はするものばかりだった。

（高ッ！）

いつも驚かされる。

トムさんはやつぱりこういった高いコーヒーがいいのかな？

家に帰って炒飯を作る間。トムさんは後ろから作る様子を覗いている。

「何？」

「いや・・・おもしろいなって。」

「そう。作る？」

「うん。」

そういつてトムさんに包丁を握らせる。

まあ、少しくらいは綺麗に切ってくれる。

あとでトムさんの手を見たら2、3枚くらい絆創膏が貼られていた。炒飯を食べてるときはテレビをつけないで二人で会話してる。

炒飯だけじゃないけど。

「学校は？」

「順調。まあ、女子がめんどくさい。」

「何それ？」

「んーと・・・まあ色々。」

「ん？」

「だーから、平和島さんと一緒にいるところとか折原さんというところ見られてちよつと。」

口ごもる私の顔を見てトムさんは心配そうな顔をする。

別に靴がなくなったり、教科書が落書きされるってくらいだし言うまでもないのに……。

「大丈夫なのか？」

「平気。どうせ飽きたらやめるし。」

炒飯をほおばりながら私が言っけどトムさんはまだ心配そう。

やめてよ……。大丈夫だよ。そんな子供じみたことされてもへこたれないもん。

いつまでもトムさんが悲しそうな顔を見ると私も悲しくなる。

「大丈夫だつて。そんな心配しないで。」

「……本当に？」

「うん。子供じみたことされただけだし。平気だよ。」

「辛いなら言えよ。」

「大丈夫。焼きもちをやいて私にいじめをするくらいなら自分を磨けて言ってやったから。」

につこりと笑う私を見てトムさんもやつと笑ってくれた。

そう……。私が好きなのはトムさんだけ。

平和島さんや折原さんなんてくれてやる。二人に彼女がいなければの話ですけど。

ベッドの中で考える。

トムさんが見ていたコーヒーのことを。

思い返せばあるときトムさんは遠慮していた。

でも、無理を言って買わせてもどうせトムさんのお金だし……。

そうだ。来週はトムさんの誕生日だ。

トムさんにプレゼントすれば喜ぶよね。

そう思って今週のバイトのスケジュールを頭で確認する。

2回しかない・・・。

自給500円で3時間労働が2回。

500かける3かける2・・・ちょっと足りないかな？

ともかくバイトを4回にしてもらって前借もしなきゃ。

トムさんの寝顔を見ながら私はにっこりと笑った。

「待っててね。トムさん。」

次の日からバイトの量が増えた。

週2回を3階へと増やしてしまった。

正直疲れる。

カフェの店員だけど・・・2時間ずっと立ちっぱなしはさすがに辛い。

足がパンパンでもーヤバイ。

けど、これもトムさんのためと思えば全然大丈夫。

「いらつしやいませ。」

深々とお辞儀をして顔を上げるとそこには・・・。

「あれ？湊都だ。」

「マジだ。来良ってバイトいいんだっけ？」

「駄目っしょ。」

「あんた何してんの？」

「あーもしかして平和島とのデート金？」

「いやいや。あの折原とでしょ？」

「二人をたぶらかすのもいい加減にしたら？」

「そーよ！まったく。」

「あんた見たいな奴なんて援交がお似合いよ。」

三人の同級生ギャル。

別にこんなことには動じない。だって・・・嘘だもん。すべてが嘘だもん。

私はトムさんが好きで平和島さんや折原さんなんかに興味はないもん。

「ご注文がないのでしたらお帰り下さい。」

「はあ？注文はあるしー。」

「では、何にします？」

「援交の似会う女の子一人ください。それとコーヒー。」

そんな馬鹿げた言葉を一人が言うとはかの子は下品な笑い声を上げる。

店内に響くその声。席に座る何人かのお客が不快そうな顔を向ける。

「すいませんが、冷やかしをなさるのであれば回れ右をしてすぐに外へと退場願います。」

「はあー？客だつてのこっちは。」

「ちゃんと接客してくださいー援交さん。」

「営業妨害ですよね？なら・・・警察にでも連絡しましょうか。」

笑いながら言う私に三人はうざそうな目をこちらに向ける。

けど、私は真検で冷たい目で三人を見つめた。

「営業妨害じゃないし。だって本当でしょ？あんたが援交してるの。」

「はーて？そんなことした覚えはないよ。」

「何言ってるの？こないだ黒人っぽい人と一緒に買い物してるの見

たし。」

黒人……。サイモン？

……。あ。違う。

「……。トムさん。」

「手をつないだり、一緒にいちゃついたり、キスしてたりしてたじやん！」

「援交だよねえー。」

「うわーキモ。」

「その体売ってるんだあー。」

「あんなのに売るなんて……。さいあーく。」

言葉は儚く耳を一直線に通り抜けた。

私の中にはトムさんのことだけだった。

トムさんといったことばれた。まあ、別にいつか。

気付くと三人のギャルはクルツと90度回転して席に向かう。

「そうだ。あの変態のおっさんによろしくね。」

「？」

「趣味悪いし、そんな可愛い子買ってるなんてマジでキモイからうて。」

私は腰に巻かれたエプロンを取って後ろにいた同僚の子に言葉を投げる。

それは精一杯の強がりです。正直それ以外のセリフをだしたら泣きそうだったから。

「休憩入りまーす。」

休憩なんてないのに私は叫んだ。  
精一杯大声で涙が出ないように。  
唇を噛みしめて休憩室と反対のお客さんの席へと歩く。  
注文された熱いコーヒーを片手に。

「お客さん。」

そう。大声で叫ぶとギャルの大股一步後ろくらいで止まった。  
馬鹿にしてきたギャルの顔がこちらを向いた。  
ゆっくりと私の腕が伸びてギャルの頭に黒い黒い地獄の惨劇へと誘  
うお湯をかけてやった。

「ぎゃアアアアア！」

反応は遅かったけど・・・。  
心の中で精一杯喜んで笑ってやった。

「こいつあああ！！！」

顔をぬぐったその手で拳を作って私めがけて殴りつけようとする。  
が、それはコーヒーよりは黒くない手によって止められた。

「何してんの？」

聞き覚えがあって優しいその声。  
顔をゆっくり上げるとそこには・・・。

「トムさん。」

「よー！」

そういつて手を挙げるトムさんの口には煙がでた煙草がくわえられていた。

もう片方の手で煙草を取って煙を吐く。

「どけよお！」

「なんで？」

「その女が私にコーヒーを！」

「・・・だから？」

「はあ？」

「あんたがコーヒー頼んだから持ってきたんだろ？」

それはそれでごめーとー。

「もー帰る！」

女は踵を返して店を出て行った。

トムさんを見上げて私は口を開けていた。

「どうしてここに？」

「お前のバイト1時間前にスタンばってた。」

「でも・・・なんでバイトのこと？」

「静雄に聞いた。」

「そっか・・・。」

「べつにコーヒー豆いらないから。」

「え？」

「湊都の手作りの豆のほうが好きだ。」

「・・・そっか。」

「おい！<sup>はぐく</sup>狛柚！なんだこれは！！」

「あ！すいません！！」

私はトムさんから離れて店長に頭を下げに行く。  
けど、横目でチラチラとトムさんを見つめていた。  
そのあとバイトはクビ。

まあーどうせあの子らにチクられて終了だけど。

その事件から一週間後。

「トムさん。」

「ん？」

「コーヒーアイスは？」

「あ・・・食べちゃった。」

「嘘!!」

「嘘。」

「よかった。」

「はい。」

「あれまあーもう食べてたの？」

「ああ。」

「って・・・あとちよつとじゃん。」

「二人で食べよう。」

「いいよ!せーのだよ。」

「ああ。」

「せーの!」

冷たいアイスに二人でかぶりつく。

本当にちよつとだけで二人で食べたなら終了してしまうほどだけおいしいくておいしくて・・・。

小さな唇とトムさんの唇が触れ合ってなんかさー。

思わず笑っちゃうww

てかニヤけてしまう。

コーヒーの味はあんまり好きじゃないけど・・・これなら・・・。

【これなら好きになれるかな。】

湊都は笑う。

「HAPPY BIRTHDAY。」

「ありがとう。」

トムさんの温かい胸の鼓動を聞いて私は今……とってもとっても  
「。」

「幸せです。」

(後書き)

やっぱり可愛いよね湊都。  
トムさんも好きだね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1876m/>

---

彼氏以上旦那未満 （トム夢？

2010年10月21日23時04分発行